



漆

赤木明登

ライフワークである、高台のついた漆碗に“祈り”を感じてきました。大きな碗を持つと、両手で捧げ持つような格好になります。神様に感謝して食べものをいただく“祈り”に近いのでは、と。でも、お厨子は人が手を合わせて祈る場所。作品としてつくるには、まだ恐れ多いという気持ちがありました。

2人展でご一緒してきた望月さんからのお声かけがきっかけで、厨子を作品としてつくりました。望月さんの仏さまに合わせて制作したのですが、新しいデザインを起こすのではなく、奈良や京都の古道具屋さんを巡り、古い物の中から“美しい”と心に響く物を参考にしてつくっていききました。僕のいつもの仕事の仕方なのです。仕上げは鞘塗りであったり、金粉と墨粉を用いた蒔地だったり。使う人の心に響いてくれるような、古色を帯びたテクスチャーを大切にしました。(談)

祈りを身近なものにする、やさしい仏さま



ブロンズ、 ガラス

望月通陽

西洋文化の香りが好きで、ギリシャ神話やイソップ童話などをモチーフにした作品を多くつくってきました。ところが祈る対象をつくりたいと思ったときに浮かんだのは、不思議なことに仏さまでした。草花や自然などに対するアニミズムのように、自分の肌に近いと感じるのは仏のかたちだったのです。

ブロンズ像の仏さまは、時と共に表面がとろっとした風合いに変化していきます。人が触れれば触れるほど、よい味になるように仕上げました。最近、木彫の仏さまの制作をはじめました。赤みを帯びたカツラの木を彫り、松油を塗って仕上げています。心の中の素朴な祈りの気持ちと呼び覚ますことのできる、そのような力のある造形を目指しているのです。

私は自分の部屋を「厨子」と考えて、つくった小仏を片隅に置いています。朝陽や夕陽が差し込んだら窓辺において、部屋全体を祈りの空間にするのです。ときに庭に連れて行き、ススキの景の中に置き、その表情を愛でています。(談)